

[インタビュー]

すれ違う男女とパンティ — 『スカートの中の劇場』をめぐって

東京大学名誉教授・立命館大学特別招聘教授 上野千鶴子

『スカ下』のプレ・ヒストリー

KCI：年に2回発行しているKCIの研究誌は、今年度より『Fashion Talks...』へとリニューアルすることとなりました。最初の2号はテーマを下着とし、今号ではその意味や社会性に焦点を当てたいと考えています。上野先生が89年に著わされた『スカートの中の劇場』（以下『スカ下』）は下着からジェンダー問題に切り込んだ画期的な著作でした。出版された当時と現在の状況について伺いたく、インタビューをお願いしました。『スカ下』出版時はどのような反響があったのでしょうか。

上野：おかげさまで、大変売れました。最近のネット用語で言うと、炎上マーケティングですね。私は数年前に『おひとりさまの老後』という本を出版し、大変売れたのですが、それまではこの『スカ下』が自分史上の売れ行き第1位でした。男性による女性論とか下着論とかは山のようにあるけれども、若い女性による下着論はそれまでなかった。要はタブー破りをしたことで、週刊誌のネタになったんです。

私の処女喪失作は『セクシィ・ギャルの大研究』です。アーヴィング・ゴフマンという、大変有名なアメリカの社会学者の『ジェンダー・アドバーティスメント』を下敷きにした本なのですが、この本の中で扱ったことは、非言語メッセージの分析です。言語情報の分析は誰でもするけれども、非言語情報である姿勢ポスチャーやジェスチャーの分析は、当時方法がなく、どれも直観的なものばかりでした。『セクシィ・ギャルの大研究』では非言語的なサインをどのようにジェンダーで読み解くかという分析を行って、そのあと『女遊び』、そして『スカ下』を出したという流れですね。スタートですでに響感を買っていた。最初から下半身学者です。

私は80年代に春画の研究をしていたのですが、当時はスライド等を見せることができず、発表する機会がありませんでした。それを最初に発表させてもらったのが現代風俗研究会（現風研）でした。その時に多田道太郎さんがいらして、「うーん、きょうは感慨を覚えました。この年齢になって若い女性が春画の報告をするのを見るとは思いませんでした」とおっしゃいました。現風研ではアカデミア内とアカデミア外の人が自由闊達に興隆して

いて、「ファッション自分史」や「トイレの研究」、「はがき風俗学」など、非常におもしろい研究がされていました。その中から生まれた名著が、熊谷真菜『たこやき』や永井良和『社交ダンスと日本人』です。通常は不真面目だと思われるネタを、周りの人たちが一緒になっておもしろがって、支えてくれる。京都にはそうしたいちびりとおもしろがりの座の文化があります。

『スカ下』が生まれた裏話についても証言しておきたいと思います。当時ポーラ化粧品に『is』という素晴らしいPR誌がありました。そこに名物編集者の故・山内直樹さんがおられました。その山内さんがこれには本一冊分の価値があると、懇意にしていた河出書房の編集者、小池三子男さんを紹介してくださいました。編集者は新しい才能を発掘してプロデュースする、仕掛け人なんですね。今までやったことのない人に、芸をさせる場を与える。この本はそうして生まれたので、山内さんや小池さんのような仕掛け人がいなかったら、私の生涯の中でうまれなかった仕事です。

ファッションという対象についていえば、建築などと比較すると、いまだに低俗とみられています。学問の世界の主題設定としては、建築や美術の方が高級なのです。アート界でもファイバーアートなど女性が使う素材を使うほどアートのランキングが下がります。芸術ではなく、工芸や手芸になってしまうのですね。鷺田清一さんたちが先鞭をつけてくださいましたが、ファッションは学問の主題として選ばれる段階ですでに低い評価を受けています。でもだからこそ、ファッションという領域はもっと研究対象として伸びしろがあると思います。それには学術研究の対象として、資料収集をし、しっかりと論文執筆、出版していくことが必要だと思います。ファッション研究は、家政学の服飾史に収まるものではありません。なぜならファッションはアートであり、文化だから。もっと評価してしかるべきものです。

下着の歴史と性意識の変化

KCI: 上野先生自身の研究関心に加えて社会的な背景がどうであったか、先生のお考えをお願いします。

上野: やはり当時の女性の変貌しつつあったという点が、何より大きいと思います。70年代までは「結婚までは処女で」などと言われていた時代が、続いていました。ですが全世界的な性革命が起こり、女性たちは性的な面で自由に、そして活発になっていきました。

日本では目につく変化はそれほどありませんが、それでも深く静かに変化が生じました。

まず婚前交渉が当たり前になっていく。「初夜」が死語になりました。私はあるエッセイで、「セクシュアリティの地殻変動が起きている」と書き、女性が性的に主体化し、能動的になったという変化を指摘しました。初交の相手が、結婚相手ではなくなることを意味しています。そのような大きな変化が生じた時に、男の前でパンツを脱ぐという行為が普通になったといえます。「見せるパンツ」や「勝負パンツ」という言葉はその頃から出てきました。

KCI:『スカ下』の中では、下着の歴史の短さについて言及されていました。

上野:特に日本女性にとっては非常に歴史が浅いです。白木屋伝説(昭和7年、百貨店の白木屋が火災に遭ったとき、下履きをはいていない女性従業員が下から見られるのを恥じて、上層階からの命綱を使用せず、火にまかれて死んだといわれる。それ以降、ズロースが普及したと伝えられている)、あれは伝説だったと言われていますが、やはり明治生まれの人は生涯パンティをはかなかったと思います。それも最初のころは、ズロースを着用し、股布を体に密着させることには強い抵抗があったと推察されます。たとえば当時女性が馬や自転車に乗ることには、タブーが存在し、長らくそのような時代が続きました。現在のような性器密着型のショーツがあらわれたのは、戦後に入ってからです。

戦後の下着革命の中で忘れてならない人は、故・鴨居羊子さんです。亡くなられて本当に残念ですが、あの方こそ日本女性の下着革命を起こした人です。下着は隠すものというタブーを破って、見て楽しい、カラフルな下着をつくりました。当時はカラフルなパンツをはいただけで娼婦扱いでした。良家の子女は真っ白い下着を身につけるものでした。せいぜい生理帯が黒とか。

KCI: 当時は下着に色を付けることがタブーだったのですね。

上野: そうです。またへそ出しは論外ですね。ちゃんとおなかまで覆わなければならない。だからどれだけ短い期間に、女性の下着が変わったか。歴史研究のおもしろさは、みんなが当たり前だと思っていることがこんなに根っこが浅いんだ、と発見することだと思います。そしてこうした下着の変化の過程で、女性は性的に自由になっていきました。それまでは女性のセクシュアリティは取引の道具であり、一発やったら一生もんでした。「傷もの」とか「責任とって」とか言われてね。今では考えられませんね。

KCI: そこで昔の男性は赤線に行き、制度の中で遊ぶわけですね。

上野: そうです。それはつまり女を玄人と素人に分割して、用途別の使い分けを行ってきたということです。妻・母にする女と、快楽用に使い捨てにする女。女性が処女性を高く売らないと食べていけない、結婚しないと生きていけないという世の中がずっと続いてきました。だから70年代ぐらいまで、女性たちは今付き合っている男が自分を遊び相手に

しているのか、それともまじめな付き合いなのか、いつも不安に思ってきました。今でもそんな相談をする若い女性がいてあきれ果ててしまうのですが、そんな心配が過去のものになったと思えるのはやはり、70年代以降に生じた変化のおかげです。その大きな歴史的变化によって女性に経済力がついたから、いちいちセックスを取引の道具にしなくてもすむようになったし、おひとりさまを貫くような女性がでてきたのです。下着を研究すると、こういう所に行き着きます。ジェンダーの研究は、品良くなんて、やってられないのです（笑）。

男性下着をめぐる調査

KCI：たしかに下着は下着にのみ留まる代物ではないと思います。『スカ下』ではこのように、男女の下着についてだけではなく、性意識の問題にも言及されていましたが、調査にあたっては、どのような苦勞がありましたか。

上野：これはエッセイ集ではなく、学術研究です。だからきちんと調査をして、データもとりました。この本の特徴のひとつは、男性の下着の個人史を聞き取りしたことです。たとえば男の子たちはいつから自分の下着を選ぶのか、いつからブリーフからトランクスに替わるのか。こうした質問をつぶさに聞きました。でも「これからあなたに下着のことをお聞きしたいのでインタビューさせてください」という申し込みをしたって話してもらえない。だから何をするかというと、飲まして、食わして、……ときどき抱かしては、あったかどうかわかんないけれども（笑）。そうして「ところで今何をはいてる？」というところからインタビューが始まる。それから「トランクス？ブリーフ？」、「誰が買った？」、「どこで買った？」、「何色？」といった質問をしていく。これはテマヒマかかった調査なんですよ。たぶん私以外にはやった人はいないと思います。

調査結果の中で本当にあきれたのは、自分の下着を全部妻に洗わせ、出張の時も全部下着を妻に準備させる夫たちが当時まだいたことです。場合によっては、妻がコンドームも忍ばせる。特に東南アジアへ出張する夫に対して。「やってもいいけど性病はかかってこないでね」、というメッセージです。ときどき今でも化石みたいな女がいて、自分の夫やボーイフレンドが素人女とセックスするのはガマンできないけれども、飲み屋やバーの女、あるいは玄人となら許せる、という考えの人がいます。

こうした考えがまだ常識なのかと思ったのは、最近裁判所が出した「枕営業は不倫にあたらず」という判決ですね。定年前の裁判官だから、おそらく50代くらいでしょう。玄人女とやるのはいいけど素人女とやるのは不倫にあたらず、という考えは本当に時代錯誤

の感覚です。でもそのような化石みたいな発言を、法廷で公然とする人がいるのですね。法廷は変化が遅いともいえるけど、そういう発言が化石に見えるほど、日本の変化は速いです。

男性が下着を自分で選択するようになったことは、やはり大きな変化です。男がファッションに関心を持つなんて、男らしくないと言われてきました。そういえば、パンツの話が一番カッコよかったのは、VANの石津謙介さんですね。早い段階から真っ赤なビキニをはいておられて、「見せましょうか」と。それで「いやいいですが、すみません、まえにあの穴は開いてるんですか」と尋ねると「いや、これはビキニだから、横からちょっと出せばいいですよ」と。さらにと教えてくださったんですね。だからやはりこうした会話をするまでに、うちとけた関係になっていないと調査できないです。本当にテーマのかかる調査でした。

現在だとタブーがなくなってオープンになりましたから、質問紙調査などで、「あなたの下着についてお聞かせください」と聞いたら、みなさん案外正直に答えてくれるのではないのでしょうか。何枚持っていますかとか、何色ですとか、どこで買いますとか。下着についてのタブーはかなりなくなったと思いますね。

ポスト・ヒストリーとジェンダーの非対称性

KCI:『スカ下』のなかで印象的だったのは、女性は男性の視線を通じて、自らを客体化するが、男性は自らを客体化する手段をもっていないという、男女の視線のねじれについての箇所でした。

上野: 私が『スカ下』を書いて本当によかったと思っているのは、どんな仕事にも前史があり、後史があるということです。『スカ下』は刊行当時、大変評判を呼びました。なかでもうれしかったのは、精神病理学者の木村敏さんが「今年の1冊」にとりあげて高く評価してくださったことです。『スカ下』で発見したのは、下着フェティシズムを通じて見えてきたセクシュアリティのジェンダー非対称性です。男の下着泥棒はいるが、女は男の下着コレクターなんかにならない。『スカ下』の10年後に『発情装置』というセクシュアリティ論を書いたのですが、その発見をもっと発展させてよりはっきり論じたのは、男は女の身体を性的に客体化するが、女は自分自身の身体を性的に客体化するというジェンダー非対称性です。女は自分が性的な主体になってもあくまで客体は自分自身であって、男を客体化しない。男の身体に萌えたりしないということです。したがって「男の買春がうらやましいなら女もやれよ」とか、じゃあ「女のヌードがそんなに腹立つなら男のヌードも消

費しろよ」とか言うけれども、男のヌードや男のボディパーツに女は萌えない。ジェンダーを入れ替えたなら平等になるという性格のものではないほど、このジェンダー非対称性は深く深く主体と身体に埋め込まれているのだということを明らかにしました。後に 80 年代から 90 年代にかけて書かれた海外のジェンダー文献を読むと、この視点が非常に出てくるんですね。同時代に同じ発見に到達していたんだと思いました。

KCI:『スカ下』のなかでも、ブラザーフッドとシスターフッドの違いや、男女のナルシシズムの差異について言及されていますね。

上野:「見る男」と「見られる女」の非対称性は、裏返せば「男の身体からの疎外」と「女の身体への疎外」に帰結します。パンツはセクシュアリティの核心で、それを通じてジェンダー非対称性が見えてきたといえます。パンツが研究対象になった時代とは、言い換えれば、女性がパンティを見せる相手ができるようになったという性革命の徴候でもあります。最近では、女性が自分からパンツを脱ぐようになると、「勝負パンツ」とかではなく、もうユニクロで十分みたいな感じですね。

KCI: そうなると、今日におけるジェンダーの非対称性には、何か変化があったのでしょうか。

上野: 変わりません。このジェンダーの非対称性は、いかに男は男になり、女は女になるかというジェンダーの主体化と深く深く関わっているのです、かんたんには変わりません。ポルノを見るときに男が何に萌え、女が何に萌えるのかということと同じで、女は女がエロティサイズされているのに萌えるのです。男を見たって萌えたりしません。最近では、美少年ものや BL (ボーイズラブ) などの、腐女子系の表現がありますが、私はそれを見て、これは男装した女の子たちだと思いました。つまり男の子に偽装した、異性愛カップルなんです。腐女子のセクシュアリティはレズビアンでもなければゲイでもなく、ヘテロセクシュアルです。

KCI: 印象論ですが、BL を好きな腐女子が実際の男性同士の行為に対して同じように萌えるかということ、やはり萌えないでしょう。

上野: そうですね。彼女たちは現実のゲイに興味があるのではなく、結局は美少年に偽装した女にしか興味がないのだと思います。美少年同士の同性カップルのなかで自分がどちらの側に立つのか、受けなのか、攻めなのか、どちらにも立てるという自由があります。それが彼女たちの性的能動性の選択です。だから彼女たちは別に、男性身体に萌えてるわけじゃありません。BL 文化に対してゲイの人たちは怒っているけど、彼女たちは別にゲイを性的に消費しようとしたわけじゃないんです。

降りゆく男性をめぐって

KCI: 女性が能動的になった一方で、男性についてはいかがでしょうか。『スカ下』では男性が女性という対象、あるいは女性器へと向かうのではなく、そこから降り始めて、フェティシズムの世界へ引き籠もる姿が指摘されています。

上野: それは予測通りでした。日本青少年性教育協議会が毎年行っている男女青少年の初交経験率のデータの推移を見てみると、この約 30 年の大きな変化は女性より男性が早かったのです。大卒の段階で童貞と処女はどちらが多いかという、処女のほうが多かったのですが、これがほとんど接近しました。ですがその後童貞のまま大卒年齢を迎える男性が、増えてきました。「やらはた」つまり、やらずのはたち、という言葉が出てきて、それから「だめ連」の中に童貞連盟、というのができた。「34 歳、性経験なし、童貞ですがそれがなにか」という半ば自己戯画化をしながら発言する男性たちが登場したのです。つまり誰もがセックスしなければならず、誰もが結婚しなければならない、という時代ではなくなりました。同時に、非婚率もずっと上昇しています。非婚は私たちの世代では超レアだったけれども、もはや男女とも無視できない人数になってきていて、まさか非婚者がこれだけ増えるとは、おそらく誰も予想しなかったと思います。

ただ、結婚していないことと性経験がないということはイコールではありません。結婚とセックスの結びつきが壊れてきた、というのが性革命です。性と愛と生殖、この三位一体が結婚のもとに成り立つことが近代家族の規範であり、ロマンチックラブ・イデオロギーと呼ばれます。これが全て解体していく。性と愛が分離し、生殖テクノロジーの発展の中で性と生殖が切り離され、結婚と愛や生殖も分離していきます。この変化を、私はけっこうなことだと思っています。ライフスタイルの自由が拡大し、多様化してきたのですから。誰もが結婚しなければならない抑圧的な社会よりは、はるかに自由です。

昔はよってたかって男女を対 (ついで) にする装置が働いていたわけですが、その装置がだんだん効かなくなってきました。これまでのように、男性は周りが段取りしてくれたらいつの間にか童貞でなくなったとか、結婚して妻を娶ったとかいうことがなくなり、性愛の自由市場化が起きました。すると、そのマーケットで相手をゲットできる人とゲットできない人の魅力格差が生じはじめます。こういう指摘をしているのは、家族社会学の山田昌弘さんです。性愛の自由市場化は家父長制よりも歓迎です。努力しないと女をゲットできなくなったのですから。

すれ違う男女と現在の問題

KCI:『スカ下』を読むと、逆に男性の方が深刻な問題を抱えているのではないかと感じました。それはつまり女性の場合は見られている、という感覚があって、その視線を自己準拠というか、内部に内面化していく。でもその一方で、男性は自分を客体化できない。男性も自分自身を内面化できるようになるのでしょうか。

上野:そのように読んでいただくのが、正しい読み方です。男は自分を客体化できていないだけではなくて、女に客体化してもらえない。したがって、ついに男は身体を取り戻せない。それで過労死する。男が自分を性的に客体化できるようになり、自分が性的身体の持ち主であることを自覚するのは、ゲイ男性だけではないかと思えますね。だから男のセクシュアリティは貧しいなと思えます。ですが、それも学習と経験ですから、最近の若い男性はとても小綺麗で、おしゃれにっていて、女性目線を意識しないわけにはいかななくなってきたのではないのでしょうか。

KCI:そうですね。とすると現在では、男性の側が見られているという視線を徐々に習得し始めている、ということはないのでしょうか。

上野:もちろんセクシュアリティも、文化と学習の産物なので変化しますが、しかしその変化の根っこが、どのくらい深いのかということですね。たしかに男性ヌードも登場して、女性の視線を気にする男性も出てきたと思えます。ですが、今日の若者の男女関係を見ると、たとえばデートDVなどの事例が後を絶ちません。

最近私がショックを受けたことがあります。それは北原みのりさんの『アンアンのセックスできれいになれた?』という著書の中で指摘されていることです。雑誌『アンアン』は1970年の創刊ですが、この40年間で年に1回くらい、カンフル剤のようにセックス特集が組まれています。北原さんの著作は、その40年分のセックス特集を読み抜いたメディア研究の白眉です。学者ではありませんが、本当に社会学研究と言ってよい本です。

そこでの指摘とは次のような変化です。初期のころは女性が裸になること、あるいは女が性的に自由になることが、どんなに輝かしいことか、とフェミニズムの雑誌のように高らかに歌い上げていた。それがどんどん「AV嬢に学ぶ」のような、セックスのテクニックを読者に教える雑誌になったということです。プロとアマの境界の敷居がどんどん低くなって、処女性で男をつなぎとめる、というノウハウ特集になり、いまではDVDまで付くようになったようです。

このしょぼい変化はあまりに悲しい。彼女の本を読んだ時の感想を一言で言うと、「そして、みんな風俗嬢になった」です。じゃあ性解放って一体何だったのか。性解放は女に何をもたらしたのか。みんなが自由に性的に主体的になったと思ったら、結局セックスのハ

ードルが下がっただけで、迫られてもノーが言えない。ノーも言えずに男に尽くし、今度はフェラのテクで男をつなぎとめる女になってしまったのかと。

性のタブーはなくなり、セックスのハードルはととも下がったけれども、それは女にとってよかったのだろうかと考えたら、どうていそうとは思えません。たとえば最近出ている『AV女優の社会学』も、読者対象は結局男でしょう。著者のAV女優経験のある若い社会学者も、男性マーケット向けに消費されています。他方、『AV男優の社会学』やAV男優の社会学者は登場していません。やはり男は自分のセクシュアリティを客体化できていないようですね。そういう中で、今でも避妊を男に言い出せない若い女が相変わらずいますから、この40年は何だったのだろうか、今にして思わなければならない時代になりましたね。

セックスのハードルやタブーは減って、道徳的な障壁もものすごく低下しました。援交こと援助交際が出てきた時、あれは正確には「少女売春」と呼ぶべきですが、私は自分の目の前にいる女子学生の中に援交経験のある女の子がいることを前提して、話さなければならないと思った時期がありました。私の予測の当たったところと外れたところは、男たちが作ってきた素人女と玄人女の障壁は限りなく崩れ、そのあいだの敷居は低くなったが、それを越したのは素人女が玄人女の方へと越して行ったということです。だからと言って、ジェンダー関係は変わらなかったというのが今の感慨ですね。

とはいえ、昔はOKだった男の傍若無人なふるまいがアウトになったという変化があります。ファッションには下着のアウト化という定向進化の法則がありますが、その過程で、セクハラ被害者の女性が、「目のやり場に困るようなかっこうをしているおまえが悪い」、あるいは「そそったおまえがセクハラに遭うのは自業自得だ」などと言われてきました。でも女の方には「何もあんたのためにこんなかっこうをしているわけじゃない」、とか「好きなかっこうして何が悪い」という言い分があります。こういう女の言い分が浸透してきて、セクハラやDVが犯罪になったのは、こういう女の言い分が浸透してきて、セクハラやDVが犯罪になったのは、とってもいいことだと思います。

KCI：やはり下着は、下着のみに留まりませんね。そして現在でも下着というフィルターを通すことで、ジェンダーをはじめとする、さまざまな現代社会の問題を発見することができるように感じました。今後はこうした問題を、ひとつひとつ論じていく必要があるように思います。本日はありがとうございました。

(聞き手：石関亮、小形道正)

上野千鶴子 (Chizuko UENO)

1948年、富山県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程退学。東京大学名誉教授。立命館大学特別招聘教授。認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長。専門は社会学、ジェンダー論。主な著書に『セクシィ・ギャルの大研究』(光文社、1982年)、『〈私〉探しゲーム』(筑摩書房、1987年)、『近代家族の成立と終焉』(岩波書店、1994年、サントリー学芸賞)、『おひとりさまの老後』(法研、2007年)など。近著に『おひとりさまの最期』(朝日新聞出版、2015年)。

(※肩書は掲載時のものです)